

2022年4月30日（日）

老球の細道667号

4月の言葉

会津バスケットボール協会 室井 富仁

相馬の実家や知人から送られてくるアスパラガス、タケノコ、山菜などを食しながら大好きなビールと日本酒に舌鼓する。テレビのバラエティー番組、吉田類「酒場放浪記」の世界になりきっている。「春よ来い♪」から「春が来た♪」。春眠夜中にトイレを忘れず。

新年度スタートしたが、世の中はまだ戦争は続き、コロナもまた復活の兆し。とりあえず現在の恵まれた環境に感謝しながら自分のできることに全集中する。明日はまた日が昇る。

1・読書から

◆「月傾いて山を慕ひ、人老いてみだりに道を説く」〈夏目漱石『虞美人草』集英社〉：通信もそうであるが、講習会や各種大会などで挨拶を述べる時、やたらと教訓めいたことを話す時がある。自戒する意味でも話すのだが、大概の人は聞いていないことを肝に銘ずる。

2・新聞、パンフレット等から

◆「歴史こそ、不安な時代でも人間が簡単に絶望しないためのよい処方箋になり得ると思う。なぜなら、辛苦の中にも諦めなかった数多くの人々の想いや、個人の一生という次元を超えた着実な営みの記憶があるからだ」〈朝日：隠岐さや香のまったりアカデミア〉：先の戦争（戊辰戦争）でわが会津の先輩たちも当時の薩摩長州の政府軍から侵攻を受け敗退し、北の青森に追い出されて生きなければならなかった。今のウクライナの人たちと共通する。

◆「老いることは、自分の付き合っている他人が死ぬことなんです。他人の死を見送ることです」〈朝日：折々のことば：鶴見俊輔〉：黒の礼服を新調しなければならないほど着る機会が増えている（コロナ禍の現在は減少）。家族、親戚、恩師、知人が次から次へといなくなる。そして明日は我が身。「死を想え（メメント・モリ）」と死というゴールを見据えて今なすべきことに真剣に向き合い、いつの間にか棺桶に片足をとなればよいのだが。

◆「三笠山に登る第一歩 富士山に登る第一歩 同じ一歩でも覚悟が違う」〈朝日：名将メソッド：元横浜高校野球監督・渡辺元智〉：社会教育家・後藤静香氏の「第一歩」という詩の一部である。目標がその日その日を支配するということを教え子松坂大輔に話し続けたという。目標が高くなるほど練習はきつくなる。高い山に登れば、また向こうにもっと高い山があることを知る。低いところに立っているといつまでもそれは見えない。

◆「『法の支配』によって国際社会の秩序を維持することは、二度の世界大戦への反省を踏まえて、人類が取り組んでいる壮大な実験です」〈朝日：耕論：国際政治学者・篠田英明〉：毎日テレビを観ながら思う。国家の戦争で市民がなぜ死ななければならないのか。市民が爆弾に恐怖におののく中、戦争を起こした人たちは安全な場所で会議ばかりを開く。

◆「雪とけて村一ぱいの子ども哉」〈朝日：天声人語：小林一茶〉：桜の咲く穏やかな午後、家の前の道路で孫たちと伸び伸びと遊ぶ。雪が消えた道路を思い切り自転車で吹っ飛ばす孫であるが、すかさず通りがかりの車に乗る老人から「危ない！」と私が叱られる。